

論説・解説

明治初期に東北や北海道を旅し、本県を「アジアのアルカディア(桃源郷)」とたたえた英国人旅行家イザベラ・バード。当時、地方では珍しい白人女性が洋服に菅笠をかぶり、馬などで旅行したのだから目立つたに違いないが、県内を含めバードを見た住民側の文献などは見つからなかったという。旅や人物像には謎も多く、そこがまた魅力でもある。

バードに関するシンポジウムが、山形市で先ごろ開かれた。ドイツ文学者の池内紀さんが講演し、バードの日本での旅行記について「日本人の生活の中にある細かい部分を書き残している。幕末

土曜コラム  
マルチアングル

明治に日本を訪れた外国人の記録は多いが、こうしたものは少ないと述べた。バードが日本を旅行したのは1878(明治11)年。「アルカディア」と称賛した置賜盆地に新潟側から至るまでの十三峠では、貧しく不衛生な村々を見たままに描写した。悪印象だけでなく、休憩した場所でバードが水しか飲まなかったからと、決してお金を受け取らな

バードの旅と人物像

った女性のことなども記録している。山形では県庁や街路など街の様子をほめる一方で、商店で売っているまがい物の洋酒のひどさを指摘。「裁判所では20人の官吏がなにもしないでいるのを目にしました」(時岡敬子訳「イザベラ・バードの日本紀行」)と、仕事をしない役人たちにも鋭い観察眼を向けた。なぜ、そんな記述ができたのか。バードは教養があり、日本に来る前にも旅をして、さまざまなお金を見聞していた。

論説委員 伊藤哲哉

「未開の日本」伝える姿勢

牧師の娘であり博愛の心があった。これらの理由を挙げた上で、池内さんは「こういう女性を生み出した大英帝国という国の力は大きい。(植民地が広がり)あらゆる所にイギリスがあった。バードを通じて当時の最良のヨーロッパ文化を知ることができる」と解説した。

O・チェックランド著「イザベラ・バード 旅の生涯」によると、バードは22歳から70歳までに大きな旅行を7回し、海外生活は9年余りに及ぶ。46歳で日本を訪れる前に北米、ハワイなどを旅し、人気作家となった。旅先の土地の習慣をできるだけ深く学ぼうとし、分からないことがあれば辛抱強く聞き出した。旅の一日の終わりに必ず日記を書き、

英国へ帰ると旅行中に出した手紙を回収して本にまとめた。日本の旅でも妹に手紙を送った。「『現地』で書かれた日記風の手紙は、臨場感あふれ、趣が豊かであったからである」と同書。そしてバードの成功の要因として、やはり「大英帝国の巨大な力」を挙げている。

作家の高橋克彦さんは、小説「ジャニー・ボーイ」でバードと通訳伊藤鶴吉の東京―新潟の道中を描いた。バードの旅行記を川西町出身の高梨健吉さんが訳した「日本奥地紀行」を参考、引用文献にしたフィクション。バードを狙う反政府勢力から伊藤らが守る冒険譚だ。武士

の世が去って10年ほど。前年には大戦争、直前には大久保利通暗殺があった時代背景がリアルに伝わってくる。

小説には、どん底の汚さを日記に書いたバードと伊藤が言い争う場面がある。旅行案内書とは違った地方の生活を伝えたいバードと、あえて文明開化が進む都市ではなく未開の地を選ぶことに、国の恥だと反発する伊藤。それでいて、この女性探検家の器の大きさに周囲は好意を抱く。イザベラ・バードは、実際にそんな人だったのではと想像してしまう。